

平成24年度第3回大村知事と語る会 意見交換要旨

1. 日 時 平成24年12月22日(土) 午後2時から午後4時まで
2. 場 所 ロワジールホテル豊橋 1階 ホリデイ・ホール
3. 参加者 (五十音順・敬称略)

梅村篤志 (産地問屋「宮ザキ園」代表)

小林久美子 (「あいちの山里で暮らそう 80日間チャレンジ」豊田市スタッフ)

西谷まゆみ (プロの和太鼓集団「志多ら」代表)

人見一弘 (豊根村森林組合林業作業員)

藤原由佳子 (愛知淑徳大学「きらきら☆したら」メンバー)

藤本忍 (有限会社のんほい代表取締役)

松島周平 (家具工房「first-hand」代表)

【松島周平】

皆さん、こんにちは。夫婦でfirst-handという家具工房をしている松島です。

私たち家族は名古屋から、現在は豊田市になりましたが、旧稲武町に移住してきました。

私たちfirst-handのテーマは「やさしい生活」です。国産の広葉樹を使った次世代まで大切に使いたい家具や生活の道具、また旬のものを丸ごといただく食事、簡素でありかつ丁寧な暮らしなど、環境に負荷をかけないライフスタイルの提案をしています。

また、移住をきっかけに森づくりプロジェクトを立ち上げました。まず1つ目は、同世代の木工家6名が集まりつくった未来家具というプロジェクトです。これは、作り手である私たち木工家が、子供たちに豊かな森を残すためにできることをという思いから始まりました。今年の6月には、それぞれが住む地域の杉やヒノキという針葉樹を使った木製品の展示会を名古屋で開催しました。今、三河の山というのは、手つかずの下草の生えない非常に危険な状態だと思います。保水力もないですし、そういう山を今、舞台にして、広葉樹で豊かな森にしていこうということで始めました。

こちらが、名古屋の主税町というところの長屋門という江戸時代にできた門を改装したギャラリーですね。そちらを借りてやりました。このパネルは、長野県の根羽村の森林組合にご協力をいただいて、チェーンソーアートでつくったものですが、森がなぜ必要なのかが一目でわかるようになっていて、木育のパネルを今回お借りして展示しました。展示

会は大変好評でしたので、来年も同時期に同じ場所で行う予定でいます。

僕らは広葉樹で主に家具をつくっていますが、針葉樹というのはどうしても強度がないということで、僕たち木工家の中では敬遠される1つのアイテムで、それを僕ら若い世代で新しい家具をつくっていかうということで始めました。こういう小物類もほとんど完売状態になりました。

それで、2つ目のプロジェクトですが、隣の設楽町で始まったプロジェクトです。こちらは山主さんの要望で、植林された人工林を人が集まる広葉樹の豊かな森にしようということで始めました。現在、地元で活動する林業従業者、設計士、大工、私たち家具職人などを中心に、この山の木を使った山主さんの家づくりが始まっています。木を切るところから始まり、製材も自分たちで行うというのがこのプロジェクトのおもしろいところだと思います。今回、このような製材機、こんな大きい刃のものを使うんですけど、これはなかなか今までなかった試みだと思います。製材というのがどうしてもネックで、製品にする前の製材というのはなかなかできない状態でしたので。

私たちは家具づくりという職を持っていますので、都会から田舎への移住が比較的スムーズにいきました。最近、同世代の人たちの中で田舎への移住を希望する人が増えているように感じています。彼らの多くは、私たち夫婦のように、自然の中で子育てをしたい、「やさしい生活」を望んでいる家族のように思います。

現在、豊田市で行われている空き家バンク事業は、田舎への移住を望んでいる者にとってとてもよい制度だと思います。ただ、1つ問題なのは、移住後の仕事がない、仕事が少ないという点だと思っています。奥三河はまだ多くの自然が残っていますが、植林された人工林がほとんどではないでしょうか。これらの山は、かつてのように手を入れることが難しくなっていており、手つかずの山も多いようです。この山や間伐材を生かした仕事を生み出せば、移住者も増えるのではないかと考えます。

仕事として、例えば岡山県に西粟倉村という村があるのですが、そちらで行われているニシアワーというプロジェクトがあり、杉やヒノキの間伐材から、無垢(むく)の床板パネル、割り箸、家具や木製品などをつくっています。ニシアワーの興味深い点は、100年の森林構想を掲げて、森林の再生から地域の再生を目指しているところです。先月、NHKの「クローズアップ現代」でも特集されていました。

また、北海道の東川町で新生児に木の椅子を贈るというプロジェクトがあります。あと、岐阜県でも美濃市で地元の木を使った木のおもちゃを贈るというプロジェクトも始まりま

す。なので、三河の木を使って何か新生児にプレゼントするというのは、一生の宝物にもなりますし、一番最初に触れたものが木ということで、また自然に対する接し方も変わってくるので、家具をつくっている立場から考えても、最初にプラスチックではなく木のぬくもりのあるものをプレゼントするというのは、子供たちにとってもいい影響があるのではないかと考えます。このような椅子ですね。

こちら、香嵐溪の写真ですが、僕が子供のときに香嵐溪に行ったときに聞いた話がありまして、香嵐溪にあるお寺の住職が、香嵐溪には温泉がないということで将来をちょっと不安視していて、それで般若心経を唱えながら木を植えていった、という話を聞いていました。その住職自体は木を見ることはできないですし、不思議だなと子供のときには思ったのですが、今現在子供がいて、自分たちは見られないけど、そういうことをするというのが今はすごく腑に落ちるといふかよくわかるんです。なので、自然の当たり前にあるこの山も1つの武器になるということで、山をどんどん活性化すれば未来が明るくなっていくと僕は思います。

最後になりますが、私たち、100年後を考えた暮らし、仕事をしていきたいと常々考えています。豊かな山は人の気持ちを和らげてくれます。豊かな森はたっぷりの水を含む天然のダムにもなります。そのダムから注ぎ出たミネラルたっぷりの水が川となり海になり、豊かな生態系をつくり上げてくれます。森というのは、私たちの生活、生きていく上で必要不可欠な存在です。今、この三河山間部の山の再生こそ、これからこの地域の発展につながり、ひいては魅力を感じる移住者を増やすものだと考えます。行政の方も、ぜひ今ここにある未来である子供たちに残る活動をしていただきたいと希望します。

【大村知事】

ありがとうございました。スライドショーまでつくっていただきまして、素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございました。

それでは、続きまして、この順番ですが、次は人見さんをお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

【人見一弘】

私の場合には、特に何かをしているということはありませんので、私のようなごくありふれた一般家庭がどうして住みなれた都会を離れて山間部に移り住んだかという事例とし

て、その経緯をお話ししたいと思います。

まず1つ目です。一家のあるじの林業への転職に伴う転居、都市部から山間部への移住という点についてです。私たち一家の場合は、あるじである私自身が林業に従事したいという転職希望がそもそもの発端です。都市部を離れ、山間部で家族と暮らしたい願望が最初からあったわけではありません。林業への転職を考えると、山間部への移住が避けられませんでした。そうすると、単なる私自身の職業、職場が変わるだけではなく、家族の今後の人生にも大きな影響を及ぼすことになります。家族にとって深刻な事態となったことが、これまできちんと目を向けてこなかった私たち家族のこれからについて深く考え、真剣に話し合うきっかけとなりました。私たち家族にとって、どのような環境で生活し、これから始まる子育てをすることが理想なのか、大げさかもしれませんが、私たちにとって幸せとは何かという問いかけそのものでした。期待と不安が入りまじりながらも、最終的には林業への転職、山間部への移住を決断しました。そこまでたどり着けたのは、複数の機関、多くの方々からの協力や助言があったからで、とても私ひとりの力だけでは実現は難しかったと今でも思っています。

2つ目、実際に生活して思うこと、住むという点についてです。

正直なところ、調べ始める前は、仕事は別として、田舎暮らしは日々のんびりと過ごせるのかと気楽に考えていました。しかし、調べが進むにつれて、意外とそうではなさそうだとわかってきました。実際、住んでみてもそのとおりでしたが、それはいわゆる私のような現役世代に限ったことではないようです。また、当たり前になにでもすぐにいつでも入手できて、手段や方法の選択肢が多い都会に比べると、確かに田舎に住むとなると不便かもしれません。しかし、移居前から強く信じ、今も変わらないのは、不便が不幸ではないという思いです。

さらに、田舎暮らしについての現実や注意事項も冷静に考えてみると、それらで田舎暮らし特有の事柄は少なく、そのほとんどが住む場所に関係なく、社会人として本来は当然な事柄だと感じます。田舎暮らしに対しては、幻想や偏見のようなものがあるのではないのでしょうか。よく現実を知り、覚悟を決めたら、あとはその地域に受け入れてもらうためにも、謙虚で素直な気持ちで思い切って飛び込む勇気が、最後は私たちには必要でした。

3つ目の林業に従事して思うこと、働くという点についてです。

移住の大前提は、私が林業の職につくことです。そして、その収入で家族を養わなければならないため、職場に対する調査はしっかりとしたつもりです。決して雇ってもらえれ

ばどこでもよいのではなくて、家族もそこなら安心できると思える職場はないものか探しました。合同説明会への参加や事業体への訪問、面接等は家族で行いました。転職、移住が慎重な決断と強い覚悟を伴う事情を職場側に理解してもらうことで、なかなか聞きにくい質問や思い切った要望も伝えられるのではないのでしょうか。

そのため、就業後3年たつ今でも、仕事、つまり働くことに対しては、よくありがちな、こんなはずではという思いは家族ともどもほとんどありません。多くの方々が働く場を求めて都市部に暮らす中で、私たち家族は働く場を求めて山間部へ移り住み、これまで楽しく暮らしています。30代半ばを過ぎて、未経験ながらも、みずから望む職業につき従事できる喜びが、多かれ少なかれある苦労を克服する原動力となっています。職場が役場と連携をとりながら対応してくれたことも、私たちの場合には思いを実現させることができた大きな要因でありました。

4つ目、余暇を過ごして思うこと、遊ぶという点についてです。

仕事や暮らしのほかにもう一つ私自身が大事だと思うのは、生活の中での楽しみです。もともと溪流釣りが趣味の私自身にとっては、結果的に山間部への移住で間違いなく楽しみが増えます。しかし、家族はどうかといえば、当時2歳の娘は別として、妻の場合は正直なところ、移住後もすぐには見つけられなかったようです。楽しみのない我慢の生活を家族に強いるのでは、家族で幸せをつかむという本来の願いに反してしまいます。それが心配ではありましたが、今では、私個人の楽しみでしかなかった溪流釣りも、移住してから興味を持ち始めた山菜取りや木の実拾い、そして、昨年私が始めた狩猟についても、家族それぞれが、徐々にではありますが、楽しみ、または楽しみらしきものを感じられるようになってきました。特に娘は、私の熱心な教育活動が功を奏して、山間部ならではの楽しみを満喫してくれていると確信しています。

家族共通の楽しみがあり、一緒になって遊ぶことができたらすてきですし、個々に別の楽しみを持つのもすばらしいことだと思います。もし、自身を含め家族の中に、都市部でしか得られない楽しみだけ、またはそういった楽しみもどうしても欲しいという人がいたとしても、移住後もそれを得るための工夫や理解、協力があれば解決できるのではないのでしょうか。

最後に、今紹介しました、住む、働く、遊ぶの3要素の重要性、今後への展開という点についてです。

都市部に住んでいるころは、住む場所から片道1時間かけて働く場所へ毎日通い、片道

2時間かけて遊ぶ場所へ時々出かけるのが私の生活でした。それは決して世の中では珍しいことではないでしょう。しかし、私たち家族は、移住後はその3つの場所が同じでありたいと考えていました。それは、新しく就く林業に移住先の山々で従事し、その環境から得られる恩恵をできることなら家族で楽しみたいという思いからです。また、我が子にとっては移住先がふるさととなるはずですので、家族で住み、親が働き、家族一緒に遊ぶ場所がそのふるさととなってほしいという親の願いもあるからです。

理由や動機は異なっても、さまざまな思いを抱いて移住できる可能性を模索し、示すことも、移住を実現し、定住へつながる機会ともなり得るのではないのでしょうか。たった3人の家族ではありますが、私たちがその土地を好きになり、地域に溶け込んで本当に村の一員となれるように住み続けていくことで、対外的な効果は少ないでしょうが、少しは定住促進のお役に立てたらと思います。そして、今私にできる一番の交流活動は、自身の経過、経緯を都市部の関心のある方々に紹介することだと考えています。

最後に、山間部への移住については愛知県交流居住センター、林業への転職については愛知県林業振興基金の方々に大変きめ細やかな対応とお世話になったお礼を述べさせていただきます。

【大村知事】

ありがとうございました。続きまして、西谷さん、よろしくお願いいたします。

【西谷まゆみ】

よろしくお願いいたします。写真を流していきますので、こちらをごらんになりながら聞いていただければと思います。志多らのこれまでとこれから、花祭りに魅せられてという題で書いてあります。

こちら、我々が拠点としている東栄町の東菌目という集落の山並みですね。この小さな小学校跡地をお借りして、稽古場兼宿舎として使わせていただいています。私は名古屋生まれ、名古屋育ちなので、入団する20年前、そのころは、本当にこの先に果たして家があるのだろうかと不安になりながら入団したという思い出があります。いわゆる限界集落と言われていて、本当に周りはお年寄りの方がほとんどです。この小さな小学校、小さなグラウンドがあるのですが、本当に猫の額ほどの、このグラウンドで足りてしまうぐらいの、一番児童が少ないときは全校で4名だったそうです。

こちら、教室が3室あるんですけど、その中の2つを使いまして、真ん中の壁を抜いて、2個分をメインの稽古場として使っています。私たち志多らは24年前にやはり都会で、小牧市で結成されましたが、音の問題があって、ご縁のある東栄町の廃校跡地にお世話になることになりました。この床は稽古で抜けまして、一度東栄町さんに張りかえていただいた床ですね。ここで毎日汗を流しています。現在のメンバー構成は、20代を中心として、演奏メンバーが9人、その他スタッフ7人で活動しています。

我々は、「人を結び、いのち奏でて、伝統を舞う」という活動方針のもとに演奏活動をしています。このたび、「蒼(あお)の大地」という作品を今までの集大成として制作に1年余りをかけて、全部新曲12曲ということで作り、これから3年かけて50カ所ぐらい回っていこうかなと思っています。この作品は、我々が大切にしている天竜川水系に伝わる花祭りを大きなバックボーンとして、今この時代に大切なことは何だろうか、人として大切なことは何だろうかと問いかける物語となっています。

そして、4月には奥三河ふるさと観光大使ということで、奥三河観光協議会さんから任命していただきましたので、ツアーの各先々でロビーに奥三河PRブースというのを設けて情報発信をさせていただいています。

こちらが、花祭りというものの、私たちの東菌目地区というところの写真です。花祭りというのは、派手さはないんですけども、花きちとか花狂いという言葉も生まれるぐらい、本当にはまってしまう人は大好きになってしまうというお祭りで、私たち志多らも、私個人としても本当に花祭りに魅せられて今までやってきたということです。

こちらは、結成して二、三年たったモノクロの写真がありまして、この花祭りのエキスを私たちが舞台から全国に発信していきたいということで、地元の方にもいろいろ教えていただきながら志多ら舞というものをつくりました。その志多ら舞という命名も地元の方にさせていただきました。

それで、私たちは、本当に太鼓好きが集まりまして、とにかく結成してから何年かというものは、太鼓さえやっていたら幸せで終わってしまったんですけども、だんだん結婚して家族を持って子供を持つようになって、そうするとお付き合いも広がって、東栄町とか地域の課題や様子がだんだんわかってくるということがあります。そして、メンバー自体も全体的に大人になっていく中で、結成して20年というものを迎えて、もっと自分たちの音楽、舞台芸術ということを通して地域に恩返しをしていきたいという思いが芽生えまして、地元の支援者や応援団の方々とともに、このNPO法人てほへというのを立ち上げ

ました。その活動としては、奥三河のき山放送局というもので、いろんな地域の元気な方々取材して皆様に広く伝えたり、いろんなことをやっています。それから、全国ツアー「蒼(あお)の大地」とタイアップするような形で、蒼(あお)の森ふるさと暮らし塾という事業も始めたところでは、東菌目地内にあります古民家を再生するための作業小屋づくりで、木の駅プロジェクトというものと連動した間伐の作業では、すごく杉林ばかりで鬱蒼としたところをもっと明るくしたり、たくさん畑やそういうことをやっていると、うちの茶畑もやってくれないかとか、田んぼをやってくれないかという話もちらちらあり、そういった活動も始めました。こちらを拠点としながら、都会からいろんな方に来ていただいて、ふるさと暮らし塾ということで、昔ながらのいろんな生活の知恵を学んだり、いろいろ体験していこうという事業を始めております。

とにかく我々が、志多らやてほへの活動を通じて感じていることは、やはり一番大切なのは人だということなので、たくさん交流人口を増やして定住人口につなげたい、そのお役に志多らという芸能集団が役に立てればと思って活動しています。今日集まった方々からもいろいろ学ばせていただき、交流させていただいて自分たちの活動も深めていければと思っています。よろしくお願いします。

【大村知事】

ありがとうございました。太鼓と花祭りのコラボということで、またこれからもぜひ大いにPRしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。続きまして、それでは、梅村さん、よろしくお願いいたします。

【梅村篤志】

旧額田町、現在の岡崎市の中山間地でお茶の栽培から加工、販売までを行っている宮ザキ園の梅村篤志です。よろしくお願いします。15年ほど前に愛知県では一番最初に無農薬有機栽培の認定をいただきまして、現在でも有機農法にこだわった体に優しいお茶の提案をしています。まだ昨年、6次産業化で「わ紅茶」という和風な紅茶を提案させていただきました。現在は、岡崎市内、名古屋市内などで販路開拓と販売を行っています。

実は、まだもう一つ顔がありまして、今日はここに呼んでいただけたのも、市民活動団体の「Nukata Sound Project」という団体がありまして、そちらでの取り組みがあったからではないかと思っていますので、そちらの紹介をさせていただきます。

サウンドといいましても、皆さんが音楽好きで集まったわけではなく、それこそ風の音や川のせせらぎ、鳥の鳴き声だとか動物、そういったものを、また市街地のほう、都心部、地方に発信していきたいという思いから、そういったサウンドという名前に命名させていただきました。もともとは商工会の青年部で立ち上げた市民活動団体です。

岡崎市には、八丁みそだとか岡崎城といったような全国的にも有名な観光名所があります。旧額田町にも、くらがり溪谷という以前には地方から訪れてくれていた行楽地があります。今、額田地域は深刻な過疎化が問題視されています。岡崎市のおよそ45%、そのうちの90%が山林に覆われた本当に自然豊かな地域で、もともとは、農林水産業でなりわいを立ててきた地域ですが、その農林水産業が今では減少してしまい、衰退してしまっているということで、若い労働力が仕事を求めて市街地だとか地方のほうに移り住んでしまい、耕作放棄地が増えて山林は荒れて、雨が降れば濁流や土砂崩れといったような環境被害が多発しています。

そういった中で、まずは地域住民の方々に意識、認識してもらおうかと思ひまして、地域住民を巻き込んだ「くらがりサウンドフェス」というイベントを開催しました。これはくらがり溪谷の駐車場でやらせてもらっているイベントですが、こういった地域の人たちを巻き込んで、一昨年から年間2回ほどイベントをやらせてもらっています。

主なイベントの内容は、地元アーティストの方々に出演いただき、音楽を中心としたイベント、あとは地域問題を題材としたワークショップ、例えば間伐材だとか竹、そういったもので、水鉄砲だとか竹トンボ、椅子を子供たちにつくってもらったり、あとは地場の産物、農業者の人たちだとか食品事業者の人たちに出品、アプローチをしてもらおうブースと、あとは不動産ブース、地元の地域の空き家だとか耕作放棄地、山林、そういったものを不動産屋さんに仲介してもらいながら紹介していくというようなブースをつくり、およそ10組の方々から問い合わせがあったみたいで、非常にうれしく感じております。

くらがり溪谷という地域での観光資源も有意義に活用して、まずはイベントに来ていただいた方々にくらがり溪谷のよさを知ってもらい、地域での伝統や文化、産業、そういったものを来た方々にまずアプローチして、あとは環境だとか自然の大切さを五感で感じてもらえるいい場所ではないかと思っています。また、観光資源を活性化させることによって地域振興にもつながり、それがまた地場産業の復興だとか地域雇用、それこそ環境資源、そういったものの大事さを学んでもらういい機会ではないかと考えています。ちょっと大げさかもしれませんが、額田地域での自立した循環型社会を少し構築していきたいと考

えています。くらがり溪谷は、本当に豊田市にある香嵐溪にも劣らない景観であります。これからも地域住民の方々と協働でバックアップしながら、皆さんで支えて活性化に向けて力を入れていきたいと考えています。

【大村知事】

ありがとうございました。

続きまして、藤原由佳子さん。現役の女子大生ということでよろしくお願いいたします。

【藤原由佳子】

愛知淑徳大学交流文化学部のきらきら☆したらメンバー、藤原由佳子といます。今日はよろしくお願いいたします。

まず、きらきら☆したらについて説明したいと思います。きらきら☆したらは、愛知淑徳大学交流文化学部2年のゼミ生によるプロジェクトチームです。今年4月から始まったばかりです。設楽町をきらきらにしたいという目的を持って活動しています。今年4月から始まったということもあり、観光協会の方やコーディネーターの方と協力し、アドバイスを受けながら活動しています。設楽町は、愛知県東三河北部の町です。名古屋から車で約1時間半で、町の約9割が山林です。

次に、私たちの活動で、今日は3つのことをお話ししたいと思います。私たちは、畑で野菜をつくり、セロリとサツマイモ、キュウリ、あと大根やナスなどを育てました。野菜はこのようにつくれるんだなと知ったことと、設楽町の土地や気候と、陰で支えてくださった方々のおかげで、こういうふう立派な野菜ができたんだなと思います。

私たちの活動の2つ目は、名古屋市千種区にある星が丘テラスで設楽町の農産品販売をしました。そこで、先ほどの野菜も少し販売し、来た方に設楽町を少しアピールできたのかなと思います。野菜は全て完売することができました。

3つ目が、12月に入ってから設楽町の子供たちとクリスマスの飾りつけをしました。地元の子供たちと設楽町でとった松ぼっくりや木の枝を使ってツリーやリースなど飾りつけをしたり、あと、折り紙でサンタさんを折ったりしました。子供たちがつくったリースは、今タイトルにあるアグリステーションなぐらというところに飾ってあります。

次に、設楽町にはきらきらの魅力がいっぱいあるのですが、ちょっと農産品というか特産品について説明したいと思います。

まず、左のエゴマ油。エゴマを多分ご存じない方もいるかもしれませんが、ゴマとついでいるからそうかと思うかもしれませんが、実はシソ科で、アルファリノレン酸というのが豊富です。それで、ダイエットや動脈硬化などの予防で、健康食品として注目されています。次に、真ん中のルネッサンストマトです。ルネッサンストマトは名倉高原でできる宝石のようなトマトです。とがっていて、包丁で切るとハートの形になります。次に、一番右端のテングナスです。テングナスの由来は、設楽町とその周辺の地域に伝わるてんぐ伝説から来ています。ナス界の大トロというと、ちょっとイメージが湧かないかもしれませんが、調理して口に入れると、とろとろしています。だから、ナス界の大トロというふうに言われています。大きくておいしいです。大きいってどれぐらいかというと、人の顔、子供の顔ぐらいのものもあります。

次に、私たちの提案です。1つ目は、ブログやツイッターでPRするということです。2つ目は、ハイキングをPRしたらどうかなと思います。山とか木のきらきらしたところをアピールしたらいいんじゃないかと思います。3つ目は、ファームステイです。4つ目は、映画をつくったらいいんじゃないかなと思います。

ブログやツイッターでPRするのですが、私たちもブログやツイッターなどで情報発信をしています。若い人たちが気軽に見てくれる可能性があるのすごくいいと思います。

次に、ハイキングです。設楽町には愛知県に2カ所しかない原生林の森があります。原生林というのは、伐採や山火事などによって破壊されていない自然の森林のことです。きららの森と面ノ木というところが設楽町にはあって、原生林もあります。こういうところのハイキングとかPRしたらいいと思います。

次に、ファームステイです。ファームステイと聞くとちょっとわかりにくいかもしれませんが、ファームは農場とか農業という意味で、ステイはホームステイのステイで、滞在するという意味です。それにバーベキューとか、あと地元の方の家庭料理とか味わえるような工夫とかをしたら、すごくおもしろいかなと思います。

次に、設楽町を映画の舞台にしようというのは、結構自然豊かでほっこりしたところなので、映画の舞台にしたらすごくすてきだと思います。

【大村知事】

ありがとうございました。いろんなことにチャレンジをしていただいてありがとうございます。それでは、続きまして、藤本忍さん、有限会社のんほいの代表取締役ということ

でございます、よろしくお願いいたします。

【藤本忍】

有限会社のんほいの藤本と申します。新城で、奥三河、新城の情報誌、フリーペーパーをつくっております。先にお配りしておけばよかったんですけど、こういったフリーペーパーを2008年から、かれこれ5年ぐらいやらせていただいている、今お手元にあるのが夏号となっていますけれども、秋、冬がちょっと今お休みさせてもらっていて、また春からちょっとリニューアルした形でやらせていただこうと思っておりますが、大体そういった形のフリーペーパー、商業目的というよりは本当に同人誌のノリというか、手づくり感ある感じで作らせていただいています。

つくり始めた当初は、周りの人からも何人かから、新城でこんなフリーペーパーづくりをやったって、すぐにネタがなくなっちゃうよと言われて、そんなものかな、ネタがなくなったらやめればいいやぐらいの感覚でやっていたのですが、実際、やればやるほど、本当に新城、奥三河というのは魅力が多過ぎて、逆にやればやるほどわからないこと、知らないこと、初めて聞くことというのが非常に出てくるので、まだやめるわけにはいかないなという感じで続けさせていただいています。

実際、今80日間チャレンジで5人の女性の方が奥三河山間地域に来ていろいろ情報発信されており、皆さんも非常に感じておられると思うんですが、本当にこの地域というのは魅力が非常に多いです。僕はいつも言っていますが、本当に1年365日、ここ奥三河の地域では、楽しむことができるエリアだと思っています。なので、80日間チャレンジではなくてほんとうは365日間チャレンジぐらいやってもらえると、ほんとうのまた魅力が伝わるのかなという感じもします。

ただ、奥三河というエリアをちょっと考えたときに、観光バスでたくさん人がやってきてお金を落としていく、いわゆる観光地と違うところは、このエリアの魅力というのは、実は一つ一つは結構地味だったり小さかったりするので、一つ一つ捉えてみると、そういった大型の観光地に比べると見劣りするような気がしてしまうんですが、そうではなくて、このエリアというのは全体が1つのテーマパークのようなものではないかと僕は感じています。テーマパークですから、一つ一つの魅力はちょっと小さ目で地味ですが、実はすごく味があって楽しめるものがたくさん連なっていますので、そういったものを自分の目的とか趣味に合わせて複数楽しみながら、エリア全体を楽しんでいくという楽しみ方ができ

るエリアだと思っています。

例えば、奥三河には、飯田線という電車も走っていて、全国でもなかなか例を見ない電車で、総延長が195キロと約200キロあり、その中で駅の数94駅、豊橋駅から長野県の辰野駅まで94駅あるということで、全部の総延長が195キロしかありませんので、その94駅で割ってみると、1駅の駅の間隔が平均で約2キロしかない。そうすると、駅と駅の間を、例えばこの部分はウォーキングしてみるとか、そういった楽しみ方もできますし、あとは、その風景というのも、最初は豊橋の都会、市街地から始まった風景が、新城に入ってくるに従ってのどかな田園風景に変わってくる。そして、そこからさらに東栄町、静岡の天竜区のほうへ入っていくと本当にこんなところをどうやって線路を引いたんだろうというぐらい深い山の中に入って行って長野県に抜けていく。そして、長野県に出ていった瞬間に、今度はぶわっと飯田のほうに行くともまた急にまちが広がっていくという景色の変化も非常に楽しい路線だったりする。飯田線一つとってみてもそういった楽しみ方ができるのですが、本当にこの奥三河という地域は、そういった目的を持って遊びに来ると本当に飽きることなく楽しめるエリアだと思っています。

ただ、従来型のというか、これが奥三河で今一番足りていないと思うのが、行政主導だったり、観光協会だったり、いろんなところで観光パンフレットをつくったり情報発信していますが、新城の情報発信です、これは東栄町の情報発信です、これは設楽町の情報発信ですという形で、どうしても行政区ごとに切られてしまう。それから、例えば愛知県のほうで奥三河のパンフレットをつくったとしても、新城からは1件、東栄町からは1件、設楽町からは1件、豊根村からは1件という、何か全部を平等に出しておかなければいけないとか、どうしても区切りとしての行政区というのが壁になってしまっているということを感じています。

それはそれでどうしても仕方がないことかもしれないが、この奥三河というのは非常にポテンシャルの高いエリアなので、それを引き出すためには、そうやって区切ってしまうと、その力が発揮できないような気がします。どうするかというと、例えば車で来る人に関しては、道路に沿って、例えば国道151号線に沿って行く提案だったり、国道257号線に沿って行くところこういうものがありますよとか、または、例えば写真を撮る趣味の人、ウォーキングしたい人、写真を撮りたい人、それから電車が好きな人、あと歴史が好きな人、そういったいろんな目的を持った人に対して、それを楽しむためにはこういうことができますよ、ここにはこういうものがありますよという、行政区に縛られない幅広い情報発信

をしていくことで、より多くの人を呼び込んで盛り上げていくことができると思います。

あとは、奥三河というエリア全体を眺めてみると、一般的な観光地と違って、例えばこの季節のこれが日本全国でも有名だから、この季節になると日本全国から何万人もの人が観光バスで押し寄せるといふものとは違って、奥三河という全体で考えると、今一番ピークを迎えている楽しいものというのが絶対どこかにある。春はここで桜がすごいピークだし、紅葉の季節はここで、それこそ11月になったら東栄町の花祭りはここにいつ行っても見られるとか、そういったものを出していつかあげることで一年中楽しむことができる、要は閑散期のない観光地という楽しみ方ができると思います。そのためにはまず、情報発信というものは本当に欠かせませんが、それも行政区に縛られないもっと目的に応じた情報発信ができるといいと思います。

【大村知事】

ありがとうございました。それでは、メンバーとしては今日は最後のメンバーということで、小林久美子さん。もともとは岐阜の各務原出身ですね。今回「あいちの山里で暮らそう80日間チャレンジ」スタッフの5人のうちの1人として、今は豊田市の旭地区に在住をしていろいろな活動をしていただいております。それでは、小林さん、よろしく願いいたします。

【小林久美子】

「あいちの山里で暮らそう80日間チャレンジ」の豊田市スタッフ、小林久美子です。

まちに住んでいた私たち5人が、「ルーガ・リーモ」という活動理念を持って愛知の山里に4カ月間暮らしました。地域の方に本当に助けて支えていただいて、みんな一生懸命情報発信をする日々です。本当に4カ月間、どのようにして情報発信、インターネットで発信していたんですが、どのように発信したら人に響くのか、どうやったら人に届くのかということを考え続けた4カ月間でもあったなと思っています。

今日は、私その情報発信をする仕事についてということと、あとはもう一点、もし私が山里を離れてまたまちへ帰ったときに、山里の情報をどうやって手に入れたいかとちょっと想像してみたので、そのちょっと思いつきのようなアイデアをお話しさせていただきたいと思います。

私が豊田へ来て初めて本当に驚いたのが、愛知県にも山里があって、山里には山があっ

て木があるというものすごく単純な、その1点です。その山は本当に緑が濃くて、どんなに高いところへ行っても針葉樹が植わっている。それに気づいたときに、それはいつか、私たちのおじいさんやそのまたお父さんかもしれないのですが、そういった年代の方々で自分で苗をしょって歩いて、その山の整地をして1本ずつ手で植えてこられた、そういう思いのこもった木がたくさん植わっているということに気づきました。豊田の森林組合の方に主伐や間伐の現場へ何度か連れて行っていただいたり、そうした木にかかわるお仕事をされていたりボランティアをされている方と触れ合ううちに、ハッと気づいたことがあります。

足助にある豊田森林組合の事務所で見かけたものが1つあるんです。間伐材を利用した木のおもちゃです。ヒノキの色も塗っていない、ニスも塗っていない麒麟の形をしたおもちゃで、それにロープの輪っかを輪投げにして遊ぶおもちゃがあったんです。それがとてもデザインがかわいらしくて、これ、かわいい、欲しいと私はそのときに思ったんです。

そこでちょっと考えたことがあり、例えばそういう愛知の山里にある山の木というものを、間伐材を使ってすてきな商品をつかって、それをまさに山里のアンテナショップのようなものがあってそこに並んでいたら、私たちがふだん何げなく通っている町なかで意識もせずになんか商品を手にとるかもしれない。それを糸口にして山のことを知りたくなったり、何かそういう場所があったらいいなという思いつきです。

私は、この80日間チャレンジの中で婚活イベントを企画、実施したんですが、最初にとっても困ったことが、まさに住んでいる山里に興味のある女性にイベントに来ていただきたくて人を募集したいときに、インターネットだけではなく、まちのどこにそのチラシを置いたらいいのか、そういうことをとても模索したというか悩んだ時期がありました。

例えば、そういった間伐材のアンテナショップにチラシを、愛知の山里全体のどんなイベントのチラシでも置けるようなスペースがあったり、こういったフリーペーパーを置けるようなスペースがある。どうしてもインターネットだけの情報発信だと、偶然に目にするということがあまりないのではないかと実は感じていました。例えばこういうフリーペーパーだと、電車を待つ間にちらちら見ている間に興味を覚えるかもしれない、そういう何か偶然の出会いというようなものが紙媒体、新聞や雑誌にもあると思います。

そして、もしアンテナショップに山里のおいしいものを味わえるカフェがあれば、例えば愛知のイノシシのベーコンを使ったベーグルサンドがあったり、豊根村のおいしいケチャップを使った何かカフェのご飯があったり、稲武だとミネアサヒの米粉、そういったも

のを使ったケーキやタルトが食べられたり、そういった場所があると楽しいなと思います。

そこで働く方たちは、そういった食材の背景であったり、お店にもし間伐材の商品が置いてあれば、その商品の背景、今、愛知の山がこういった山で、現場で頑張っている森林組合の方や木にかかわる森林ボランティアの方だったり、そういった方たちの思い、山主さんたちが一生懸命活動しておられたり、そういうことも物語を持って語ることができる、そのような人がもしそこで働いていたら、本当に都市の中に山里が少しあるようにいいなと思います。そのカフェでは、例えば物をつくるワークショップができたり、民俗学的な講座が開けてもいいと思うし、何かとても有機的なというか、定住促進の相談ができる場を設けてもいいと思います。そうしたところで、地域に入って暮らすという決心や覚悟をもし興味のある方がだんだんに入ってつけていけるような、そういう取っかかりになるような場所がまちの中にアンテナショップとしてあったら楽しいと思います。

【大村知事】

ありがとうございました。

それでは、また皆さんから、あと、これからフリーディスカッションしていただきたいと思いますが、梅村さんが途中でもう、何か香港に行かれるんですか、今日は。何かお茶を売り込みに行かれるそうございまして、もうあと10分ぐらいで出なきゃいけないということなので、まず梅村さんから、先ほどのお話の中で言い足りなかったこととか、また皆さんのご意見を聞いてさらに思ったことなどあれば、おっしゃっていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。

【梅村篤志】

皆さんがそれぞれいろんな思いで、今日参加されていると思いますが、共通して言えるのが、やはり耕作放棄地だとか山林問題というような、放置山林、そういったものがやはり共通の山間地での問題ではないかなということを印象で受けました。それこそ家具工場の松島さんが、三河材を活用した家具づくりを先進的に行われているということで、同じ問題で頭を抱えている1人としては非常に心強いなと共感しました。

あと、人見さんにちょっと質問ですが、僕の友達も林業をやりたいということで志しているんですが、将来的に独立を考えていますが、現実的に家族を持って林業で独立するという事は難しいんでしょうか。

【人見一弘】

非常に難しい質問ですが、私の場合には、独立ということも視野には入っていますが、あくまで森林組合の作業員として林業に従事するということを念頭に置いていましたので、そのことについて具体的にお答えできるほど知識がないものですから。

どういった形で林業に携わりたいのかということにもよると思いますし、実際にそういう方がみえないわけではないと思いますので、そのことについて、私の場合には林業振興基金という愛知県の相談窓口に行ったものですから、そういった公に開設されている窓口へ相談に行かれるのが意外と近道だったり、直接森林組合であったり、いろんな林業事業体がありますので、自分で直接問い合わせてみることで何かきっかけが得られるのではないのかなと思います。いろんな形があるということも、実際には自分がついてみて感じたことです。

【梅村篤志】

ありがとうございます。やっぱり補助金だとか助成金でないと山林での生活というのは難しいんじゃないでしょうか。

【大村知事】確かに、日本の国内での林業、木を植えて育てて、それで伐採して、そこで木材を販売して収支を立てていくというのは、正直言ってなかなか大変だと思います。ただ、だから、それを我々としては、いろんな基金とかそういったものを積みながら後押しをしてということだと思います。あとは、地域でできるだけコストダウンしていくようなそういった努力も引き続きやっていくということだと思っています。トータルとしては、なかなか状況的には厳しい状況かなと思います。

ですから、林業というのは山をみんなで育てていく、さっきのスライドショー、松島さんの、間伐もしていないから下草が生えないような、ああいう山は不健康なので、ぜひやっぱり間伐もし、下草刈りもやって育てていくような、そういった林業というか森林政策全体で考えていく必要があるかなと思っています。

ですから、もしそういう気持ちをお持ちの方がおられたら、また、人見さんがさっき言われたように、いろんな相談の窓口を開いていますからまず、地元の方だったら岡崎市さんとかに相談されて、県のほうに相談されたらいいかなと思います。

【梅村篤志】

ありがとうございます。

【大村知事】

私からちょっと梅村さんになんですが、先ほど、くらがりサウンドフェスということで、これはどのぐらい、何人ぐらい参加されますか？

【梅村篤志】

1,500人から2,000人ぐらいです。

【大村知事】

1日？

【梅村篤志】

1日です。くらがり溪谷の駐車場の3分の1を観光課のほうにお借りしまして、その3分の1を、自分たちで協賛金だとか地域企業さんから集めまして、それからチラシをつくったり飲食ブースをつくったりだとか、そういったことで来場者を呼んで、くらがり溪谷のよさを発信しているというようなことです。

【大村知事】

それはいつごろ。夏ですか。

【梅村篤志】

4月と9月、年に2回ぐらいやらせてもらっています。

【大村知事】

2回やるわけですか。なるほど。これからもずっとやっていくと。

【梅村篤志】

そうですね。続けていきたいです。

【大村知事】

なるほどね。ぜひ大いにPRをしていただければというふうに思います。

それでは、さらに続けていきたいと思います。松島さん、いかがですか。最初に発言されて大分時間がたちましたので、またさらに追加のご発言があれば。

【松島周平】

皆さんの話、すごく興味深く話を聞かせていただいたんですが、やはり僕が職業柄、最後の小林さんの夢が本当にどんぴしゃな感じで。結局、今まで多分、針葉樹を使った木の小物だとか、そういうもの、皆さん頑張ってつくってみえるんですが、道の駅とかいろいろなところに置いてあると思うんですが、どうもちよっとほこりをかぶった感じになっていて、どうもそこで売り上げがあるとかそういうものではなく、地元の人がつくって見せているだけという感じもちよっと否めないと思います。

僕は家具というもので生計を立てていますので、デザインだとか、人がどのように気に入るかだとか、そういうことを夫婦で2人いつも考えて話し合っつつつくっていますので、もしそういうアンテナショップだとかそういうものがあって、そこで商品を売るということが三河の山の再生とかにつながるのであれば、ぜひ参加したいなと思います。

【大村知事】

使われるのは広葉樹ですか、やっぱりどうしても。

【松島周平】

やはり基本は広葉樹。結局、使われる側というのは、杉というのはすごく傷がつきやすいんです。ですので、ダイニングテーブルで杉の天板を使って、理解のある方ならいいのですが、どうしても傷がついたりするので、僕らは個人なのでそこまでは気にしないのですが、クレームというのがどうしても後で、いや説明したよというのも出てきますので、そういうところで多分家具屋さんには使いたがらないのだと思います。

【大村知事】

一番多いのはケヤキとかですか。カエデ？

【松島周平】

いや、ケヤキというよりクルミ、桜ですね。最近はそういうものが多いですね。あと、うちの妻が北海道出身ですので、北海道のタモだったりとか。

【大村知事】

北海道から持ってくる。そうですか。

【松島周平】

あと、原木で買ったりもするんですけども。

【大村知事】

三河の木はちゃんと原材料で調達できますか。

【松島周平】

ただ、どうしても広葉樹に関しては三河の材でそれほど、この間足助の市に桜のすごいのが出ていましたけれども、多分ごくたまになので、正直、東北だったりとか北海道から木を、市に出ますので、それを使います。

【大村知事】

なるほど。そちらまで買いに行く。

【松島周平】

いや、市が各務原にありますので、そこで買ったりですとか、名古屋、甚目寺のほうに北海道の支店がありますので、そちらで買ったりしています。なので、これからどうしても針葉樹を使ってデザイン性の高いものを売っていくのが僕らの課題だと思って、先ほどちょっと紹介した家具展とかをやっています。

今回、僕らは出口になるので、切るところまでできると思うのですが、そこを担えるということで、僕が家具をつくっていて、そういう意味ではこれからの山の発展にすごく欠

かせない仕事だなと考えています。

【大村知事】

なるほど。ありがとうございます。

それでは、人見さん、今、実際に林業に携わっておられて、苦労話というか、こうしたらどうかって、そういう話がありますか。

【人見一弘】

たくさんあるのですが、お話しできることというと、何よりも私がついた豊根村というのが非常に急しゅんな山が多くて、歩くのもやっとというところに、杉、ヒノキが植わっている。どうやって植えたのだろうと思うような場所にも杉、ヒノキが植わっている。危な過ぎて作業がなかなかという場合も。ただ、安全を確保というのが第一ですので。

【大村知事】

それはそうですよね。

【人見一弘】

あとは、仕事についてなんですけれども、非常にどうしても山に入ると寒冷というか、寒いものですから、服についた水分が解けてもう一度凍るとか、機械が凍るとい、そういう環境の中で実際、機械が入れない場所もありますので、そういったところへは私たち人間が歩いていくという、そういう大変さは就いてみて改めて感じます。

【大村知事】

なるほど。梅村さん、もうそろそろですか。最後に一言いかがですか。

【梅村篤志】

今日は、こういった席に呼んでいただきまして本当にありがとうございます。今後も山間地の活性化に力を入れていきたいと思っていますので、皆さん、今日ここで話しして一緒に会えた皆さんと協力しながら、意見交換もできたことで非常にうれしく思っていますので、今後ともよろしく願いいたします。

【大村知事】

ありがとうございました。本業のお茶をぜひたくさん売っていただいて。

【梅村篤志】

ありがとうございます。

【大村知事】

愛知のお茶も我々もしっかりPRしますので。

それでは、西谷さん、今ずっと、林業とかそういういろいろな産業についてお話しいただきましたが、地域の文化とかそういったことも含めて、先ほどのお話にさらに追加してお話しされるのであれば、ぜひお願いします。

【西谷まゆみ】

文化というのは、私たちの花祭りもそうですが、とにかく人がいないと残せない。生ものなので、やっぱり形を変えていくことはあっても、とにかくある程度の人がいないと、思いのある方がいないと残せないというのは本当に身にしみて思っていますので、とにかく人を残さないといけない、というふうにすごく思っています。

それで、文化というのは、暮らしがあって文化というふうにつながると思うので、ふだんの暮らしが成り立っていかなければ文化をやっている余裕もないということで、やはり若者が定住するというには必ず仕事がつきものだというのは、東栄町内でも人に会えばその話になるぐらいで、どうやって人を呼び込み定住してもらうかということがすごく大事で、こうやって山とか木を仕事にしていらっしゃる方と出会えて、また交流させていただいていろいろ教えていただいて。何か東栄町の森林組合も、Iターンの方がこのところ2桁の人数ぐらいいるそうなんですけど、その方々がずっと残ってくれるかということに今度気がいくので、やはり山のお仕事が成り立っていくということはすごく大切なことだと思っています。

【大村知事】

ありがとうございます。そうですね。文化とかいろんな、そういった花祭りもそうで

すけど、やっぱりみんなが継承していくためには、そこに人が住んで人が伝えていかないといけませんからね。ですから、我々もしっかり、定住、住んで働く場所をつくるということこれから一生懸命やっていきたいと思っております。

それでは、藤原さん、またさらにいかがですか、先ほどの発表に加えて。

【藤原由佳子】

皆様のご意見を聞いて、まだまだ自分は勉強不足だなと感じます。そんなすごい専門的なこととかは言えないのですが、若い人がどうやったら山里とかに来てくれるんだろうかと考えていて、興味を持ってもらうにはどうしたらいいんだろうかなと思います。自分だったらとしか考えられないのですが、さっき私が提案したことがちょっと限界です。

【大村知事】

きらきら☆したらのメンバーというのは、みんな名古屋の子ですか。今の皆さんのゼミの、名古屋というか、やっぱりずっと名古屋及び名古屋近郊というか。

【藤原由佳子】

名古屋の子もいれば、周辺の市町村の。

【大村知事】

じゃ、やっぱり皆さん、新たな発見があったりとか、そういう感じなんですか。

藤原さん自身もそうですか、やっぱり設楽町に行つて。

【藤原由佳子】

そうですね。ずっと名古屋に住んでいて、稲武とか中津川とかは野外学習で少ししか行ったことがないので、こうやって長期で行くということがなかなかないです。

【大村知事】

なるほど。ぜひ、またこれからも、先ほど言われたファームステイを進めていければと思います。

それでは、藤本さん、いかがですか、またさらに。

【藤本忍】

この地域には、もともと昔から脈々と受け継がれてきたもの、それから歴史であったりとか伝統的なものであったりとか、非常にたくさん残っているのと同時に、皆さんのような若い世代の人たちが今度新しいものを生み出していたりとか、そういったことが非常にあるんだなと。特に和太鼓集団の志多らさんに至っては、もはや新しい伝統芸能をまた生み出しているというふうに見えますので、そういったものというのは、やっぱり新しいこの地域の魅力というのがまた出ているのかなと。僕の仕事としては、そういった情報というのをいろんな人に広く知っていただくためにまた情報発信もしていかなきゃいけないなというふうに感じました。

【大村知事】

新城でやっぱりフリーペーパーを最初にやったときは、先ほどお話がありましたけれども、そんな情報なんかすぐなくなっちゃうぞとか言われたんでしょう。

【藤本忍】

言われました。飲食店だって、グルメ情報だって、そんなの、ちょっと紹介したらすぐなくなっちゃうよと言われて。

【大村知事】

でも、実際は、まだネタはどんどん出てくるわけですね。

【藤本忍】

行くたびにやっぱりいろんな方から話を聞きますので、そうすると、誰々さんを知っているかと言われると、いや、済みません、知りませんという、勉強不足でということばかりになり、やればやるほど、知れば知るほど自分が勉強不足だな、知らないことがいっぱいあるなということを思い知らされているという状況です。

【大村知事】

なるほどね。これからはしっかりとさらに深く掘り下げてやっていただけたらありがた

いなと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、また小林さん、いかがですか、先ほどにさらに加えて。

【小林久美子】

続きになりますけれども、本当に都市の中に山里を感じられる場所があると、そこに情報が集まる。そうすると、山里に関心のある人も気楽に来られるし、もともと、もしかしたら山里で生まれ育った方も、懐かしさだったり何かを求めて来られるかもしれない。そういう希望を私は持っています。

例えば、そういった間伐材の小物はきっとコストが合わないだろうと思うんです。植えられた木というのは、やはり建築の材として、建材としてではないと、それも今なかなか厳しい話だというふうに、私も全く知らないながら聞きますので、例えばそういったところで若い女の子が来ていて、私も結婚しておうちを建てますというときに、国産の木で家を建てたいですか、何かそういうふうにつながれたらいいなと思いました。

【大村知事】

ありがとうございます。

チャレンジスタッフの後ろ4人で、どなたか何か意見を言いたいという方はおられますか。ご意見などよろしいですか。じゃ、沓名さん、どうぞ。

【沓名奈津子】

今日は本当に貴重なご意見をたくさん聞かせていただいて、私ももう残り少ないながらも、今日聞いてあっと思うことがすごくたくさんありました。

そして、きらきら☆したらのことは、私も一緒に星が丘で販売のイベントでもお手伝いさせていただいて、本当に設楽町自体を知らない方というのがやっぱり都会にもたくさんいることをそのときに知って、でも、お野菜の安さにびっくりして買っていただく方もたくさんいたので、私も、奥三河をどうやったらもっと皆さんに知っていただけるかというのをずっと考えてきていて、こうやって皆さんのお話を聞いて、こういうことがあるんだなと思いました。

私も、奥三河を知ってもらおうという点で、体験メニューをもうちょっと充実させて、家族みんなで、先ほどの話でも、家族で遊ぶ、働く、住むというので、趣味を持ったり奥三

河でいろいろな遊びができるということもあるというのを私も体験ですごく知ったので、そういった面で、体験メニュー、家族で体験できる、そして長期でできるメニューをもう少し増やせたらいいなと思いました。

きらきら☆したらの子たちも多分、名倉で貸し農園を借りてお野菜をつくって、そのつくったお野菜を販売していたというのもあるんですけど、貸し農園で家族で都会から来てみると、意外にこういうところがあったんだなというのを知る機会もできると思うので、そういった面で、長期でできる体験メニューも増やしていただけたらなと思いました。

【大村知事】

ありがとうございます。それでは、松島さん、どうぞ。

【松島周平】

最後に、そんなに大した話じゃないんですけども、僕ら、2010年の4月に名古屋から稲武に引っ越してきたんですが、本当に田舎暮らしというのは古い生活でも何でもなくて、とにかく僕は本当に今、最新だなと思っていて、あと、本当に格好いいし、おしゃれだし、こんなすてきな生活はないと思っています。それで、僕はうちの息子と妻と3食ご飯も一緒に食べるような生活をしていますので、家族も楽しいですし、本当に今幸せなんです。そのことを都会の人も、僕らが本当に幸せだと思っていることを少しでも多くの人に感じてもらいたいなという、今、手を挙げて何なんですけど、本当にすごく田舎暮らしは素敵なので、ちょっと最後にそれだけ言っておきたかったです。

【大村知事】

ありがとうございました。

それでは、時間もやってきましたので、そろそろこの会は取りまとめということにさせていただきます。今日は皆さんから本当に貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。まずもって御礼申し上げたいと思います。皆様からお聞かせをいただきました三河山間地域の魅力、それがどうすればもっと元気にできるか、もっと人に来ていただけるか、今、最後に松島さんが言っていたように、そこで暮らしていくことはこんなに楽しいんだということをもっともっと多くの人に知っていただければ、たとえばそこで移り住んでくるということが簡単じゃなくても、例えば年に何日かでも来てもら

って、泊まって楽しんでもらうとか、リフレッシュしてもらうとか、そういうことがこれからもあっていいんじゃないかと思っております。

私も自分の個人的なことを言うと、僕は矢作川の一番河口のほうのところの生まれ育ちなので、碧南なので、全く平野の子なので、山というと何か見上げるような感じがあって、ここで住んでいると何かころころ転げ落ちちゃうんじゃないかというような感じを覚えますけど、それでもやっぱり来てみて、何かすがすがしさとか、いろんな自然、山を見ると本当にほっとすることがありますし、また、先月初めて東栄町の花祭りをちょっと拝見させていただきましたけど、何か知事が花祭りを見るのは五十何年ぶりだとかいう話を聞きましたけど、天竜、奥三河であれだけの文化が営々と引き継がれているというのはすばらしいなと思いますし、文化があり、歴史があって、そしてそこに人が住んでいる、人の息遣いが聞こえる、そういう三河山間地域をこれからも皆さんのご意見をいただいて大いに盛り上げていきたいと思っております。

今日は本当に貴重なお時間をいただいて、貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。また、いただきましたご意見はこれからしっかり我々も県政に反映できるように頑張っていきたいと思っておりますし、引き続きいろいろな面でまた我々にお声をいただければありがたいと思っておりますので、よろしくお願いを申し上げます。

それでは、今日は限られた時間でありましたけれども、お時間をいただき、ご意見をいただきましてありがとうございました。改めて感謝を申し上げます、最後の締めくくりのご挨拶とさせていただきます。本当にどうも今日はありがとうございました。